



熊事研会報

第 123 号

熊本県学校事務研究協議会
発行人 会長 上田 千浩
編集代表 研究部長 平野 哲也

～目 次～

- 事務局長あいさつ
- 平成 29 年度大会総会報告
- 全事研大会参加報告
- 研究部各班紹介

事務局長あいさつ

菊池市立菊池南中学校 平尾 幸夫

「みなさんと共に頑張ります」

6月の総会において承認をいただき、事務局長を務めさせていただくことになりました。熊本県学校事務研究協議会（以下、熊事研）会員になって 27 年目です。実はこれまで熊事研には、一会員としての関わりしかありませんでした。役員として初めての務めが事務局長となります。

今年度は、機構整備委員会の答申を受け、2回に分けた大会の初めての年となります。その大切な年に、役員の一員として、熊事研に携われることを光栄に思っています。そして、会員の皆様のご意見を受けたこの方向性が、より良い組織・大会となるように、役員として微力ながら精一杯努めたいと思っています。

熊事研は全国的にも数少ない研究協議会という形態を取っています。県内 11 地区の意向を各地区の理事（会長）さんが理事会で示されます。それをもとに熊事研の様々な取組やしくみ等の方向性が決まります。よって各地区において、会員の皆様一人ひとりの考えを、しっかりもっていただくことが大変重要となってきます。これまで先輩方のご尽力によって、43 年間作り上げられた熊事研をさらに発展させていきましょう。

私たち学校事務職員を取り巻く環境は、ここ数年で大きく変わりました。学校事務職員が果たさなければならぬ役割も大きく変わりました。私たちは、社会に求められているこの状況に、対応できるのか、できないのか、問われています。全国を見渡せば、様々な任用形態、業務、研修体制があります。状況的に大変厳しい地区もあります。学校事務職員が華々しく活躍している地区もあります。熊本では今後、熊本県と熊本市で大きな違いが出てくるかもしれません。各市町村でも違って来るかもしれません。10～20 年後、「一般事務員・学校事務員・教育研修事務員・行政事務員（国・県・市町村）・経理事務員・人事係事務員・受付係・物品購買事務員・・・他」の現在存在する職業の半分が、AI・ロボットにより代替可能な職業とされています。この熊本に学校事務職員という職業は残っているのでしょうか。学校に必要不可欠な職業になっているのでしょうか。学校で活躍する唯一の行政職員として、真剣に考える時期がきています。

どのような状況にあっても、「子どもたちの豊かな育ちを支援する学校事務」という目標は絶対に変わらないことを私たちは学びました。この目標達成のために、この熊事研という組織を利用し、会員の皆様と一緒に明るく楽しく議論できる場をつくっていかねばと思っています。1 年間、どうぞよろしくお願いいたします。



平成 29 年度大会総会報告

来賓挨拶

熊本県教育庁教育総務局学校人事課審議員 田村 紀広 様

昨年 4 月に発生しました地震から 1 年が過ぎました。この間被害に遭った地域の学校においては児童生徒の心のケア、学習支援等、子どもたちが安心して学習できるよう多くのご配慮をいただき感謝しています。さて、今年 3 月に熊本県教育施策の基本方針である熊本県教育大綱を策定いたしました。熊本地震など大きな社会状況等の変化を踏まえ、本県教育の基本方針を大綱としてまとめたものです。本大綱では熊本の人づくりと、教育環境の整備と 2 つの側面から基本方針を整理しています。中でも熊本地震で被害を受けた学校施設の早期復旧や学校が防災拠点・避難所となるための施設整備を進めること、また、防災教育を進めるとともに防災に重点を置いたコミュニティ・スクールを導入することなども明記しております。他にも、家庭の経済的事情により、子どもたちが進学等の夢を断念することがないように取組を進めます。学校事務の皆様におかれましては、この大綱の実現のために、今後更に専門的な知識を生かし良好な教育環境の整備に尽力していただきたいと思います。

また、ご存じの通り、事務職員の職務について学校教育法ではこれまでは「事務に従事する」とされていましたが、学校の事務が複雑化多様化することに伴いまして、「事務をつかさどる」と改正され、4 月 1 日から施行されました。今回の改正は学校組織における総務財務等の唯一の専門職である事務職員の職務を見直すことにより、その専門性を生かして、学校の担当業務を一定の責任をもって、より主体的積極的に学校運営に参画することを目指すものです。これまでよりもさらに広い視点に立って、校長を経営面から補佐する学校運営チームの一員としての役割に期待しています。

本県では平成 25 年度から学校事務の採用区分を教育行政・教育事務に変更しました。市町村立学校と県立学校及び教育委員会事務局を経験しながら幅広い視野と知識を習得し、学校運営に携わっていく人材を育成していくことを目的としたものです。学校事務を取り巻く環境が大きく変化しているなか、このような変革を好機ととらえ日々の業務に努めていただければと思います。

最後になりますが、本研究大会が「変革の時代に対応する学校事務の創造～子どもの豊かな育ちを支援する学校事務」に向けて、学校事務改善の研究を深め、学校経営の一翼を担う事務職員として資質向上を図る場として建設的で実り多きものとなることを祈念しましてご挨拶とさせていただきます。



講話 「これからのチーム学校への思い」

熊本県小中学校長会 会長 中曾 哲也 様

「これからのチーム学校への思い」というテーマで、ご自身のこれまでの学校事務職員との関わりの中からたくさんのエピソードを交えて御講話をいただきました。以下はその概要です。

学校をチームとしてマネジメントする際、【理性のマネジメントと感性のマネジメント】を考へてはいかがかという話を聞いたことがある。【理性のマネジメント】とは、理論的で筋道がたっていて、きちんと説明もされている、しかし「やりたくない」と思われてしまうマネジメント。これは人を説得して動かすので、「やらされ感」が発生する。一方【感性のマネジメント】は、何かをやらうといった人の話を聞いて「ああ、そういう風に、そういうことをやりたいのね。じゃあ一緒に頑張りよう。」という気持ちにさせるマネジメントのことである。この場合は、納得して行動を起こすので、相互にプラスのアイデアも浮かび、よりよい方向へとすすんでいくのではないだろうか。この二つのマネジメントの間には職員間の人間関係が大きく関わってくる。「チーム学校」を進めていくためには、【感性のマネジメント】を行い、良好な人間関係を築いていかななくてはならない。そのためには、それぞれ情報の発信を行い共有し、そのすり合わせを行って行くこと大切だと思う。

4月に学校教育法が改正され、学校事務職員の職務が「従事する」から「つかさどる」になった。学校運営に学校事務職員が積極的に参画することにより、スムーズな学校運営ができると思うので、運営委員会等にも出席し、財務の面を中心に様々な方面から意見を述べて欲しい。

本校では歴代の校長先生方が、様々な言葉を校長室に残していかれている。その中に「迅速・的確・丁寧」という言葉があり、仕事を行う上で大切なことであると思う。そのことを念頭に仕事をする上で、自分が気をつけていることの中に【30秒の確認】がある。その時は手間ではあるが、少し確認を行うことにより、後々修正のための「3時間の手直し」を免れることができるということである。

黒船カンパニーの中村氏の講演の中で一番好きな言葉が【0.2秒の返事。ただしYES】という言葉である。人が何かを頼んでくるときは、選んだ相手はその頼み事をできると思っているから頼んでくるのであって、早い返事が喜ばれるし、その後の人間関係もうまくいく場合が多い。また、頼まれごとは試されごとでもあり、頼まれた以上の成果が上がるように努力すれば、頼んだ相手には感謝され印象にも残る。それがよい循環となり、認められると自分自身もやる気がでる。大変ではあるが、どうせやるなら楽しく仕事はやりたいものである。心の持ちようが変わることにより、人に対して寛容になり、仕事をしやすい環境が整えられていくのではないかと思う。

「チーム学校」をすすめるために様々な書物を読んでいるが、その中に【パラダイムシフトとインサイドアウト】という言葉があったので紹介しておきたい。【パラダイムシフト】とは何かを行う際に、思い込みや偏見を捨てて見る視点を変えること。【インサイドアウト】とは、原因は自分の外にあるのではなく、自分にあるのではないかと見る視点を変えることである。



その他にも学校事務職員の発案で行った1m地主の取り組みや、人と接していく中で自分の人格を磨くために必要な7つの習慣についての紹介もありました。現在勤務されている学校では「だれもが笑顔で行ける学校」という目標を掲げていらっしゃるそうです。365日、子ども達も私たち教職員もみんなが笑顔で学校に行けるよう、私たち学校事務職員も「チーム学校」の一員として校長先生を補佐し、頑張っていきたいと思っております。中曾先生、貴重なお話をいただきありがとうございました。

全事研大会参加報告について

「第49回 全事研京都大会に参加して」

菊池市立七城中学校 岩木和美

社会の変革とともに、私たち学校事務職員の改革が求められている昨今、どう意識改革をし、どう行動するのかの道しるべを求め、全事研大会へ参加しました。今回は1日目の全体研究会と2日目の分科会についてご報告します。

大会1日目「地域協働による学校づくり地域づくり」～地域との協働を推進する事務職員の役割と学校事務の未来～をテーマとし、基調報告から全体研究会へと進められました。後半のパネルディスカッションでは、地域協働の必要性に論点を置き、現状と課題（地域間格差、共有不足など）や地域連携推進教職員について討議が行われました。なぜ地域連携推進教職員なのか、学校事務職員がその担い手となってほしいからだ、大会中あらゆる場面で話がありました。私は、パネリストの西川さんが最後に話された「keep innovating」＝「自分に合った改革、成長」という言葉が心に響きました。背伸びをせず、自分のペースで、今一番身近で大切な目の前の子どもたちのために、まずは現状を把握し、どう行動すべきかと気持ちが高揚した言葉でした。

大会2日目、第5分科会（奈良支部）に参加しました。研究テーマである「学校事務を創る、挑戦からさらなる“しんか”へ」の“しんか”を「進化」「深化」「新化」「真価」と捉え、奈良県の現状から見える課題を把握し、今後学校事務職員が担うべき職務について研究を進められていました。実践例として、平成27年度に策定された奈良県版グランドデザイン「すまいる 奈良」からなる実践計画書を活用し、目標設定から目的、具体策を書き出し、学期ごとに成果と課題を見つめ、今後につなげる取組を発表されました。また、「地域とともにある学校づくり」のなかで、学校事務職員が調整・企画・統括を行うコーディネーターとして、学校内・学校間・地域・保護者との連携を推進することができるのではないかと提案されました。

午後は、2つの討議の柱について、スクール形式で討議が行われました。討議の柱1では「『チーム学校』の一員として学校経営を支える学校事務職員の果たす役割」について、コーディネーターとしての役割を中心に据え、意見を出し合い討議しました。教員とは違った視点で、環境課題の解決策を提案した実践例や課題発見のために子どもアンケートを実施し、他の教職員に投げかけているなど課題を分析し、あらゆる角度から解決策を見出す「つなぐ」ことの重要性を再確認することができました。討議の柱2では「求められている新たな役割として『地域とともにある学校づくり』に学校事務職員としてできることは何か」について考えていきました。より子どもと向き合うこと、ここまでが学校事務職員の仕事というくくりをなくし、すべてが自分の仕事として関わるなど意見が出されました。最後に助言者の方は、地域連携はまず「ワンストップサービス」＝内なる情報を共有し、知識をもち事務室で完結させること、そうすれば倫理綱領が変わると助言されました。今回の学びを現場へ持ち帰り、実践へとつなげていきたいです。

今回はキーワードとして「地域連携」「情報共有」「マネジメント」「つかさどる」の4つの言葉を聞くことが多かったように感じます。さまざまな県の学校事務職員の方と気持ちを共有することができ、一歩踏み出す勇気をいただきました。学ぶ姿勢をもって、これからも色々な大会に参加していきたいと思います。

「全事研（京都大会）に参加して」

山鹿市立鹿北小学校 佐伯涼子

8/2～4まで京都市で開催された京都大会に参加させていただきました。

今日、「地域とともにある学校づくり」「チーム学校」という言葉を教育現場でよく聞くようになりました。本校も、開校5年目を迎え、隣接する中学校と1小1中で小中連携の取組を進めているところです。さらに、今年度からは、保育園も統合し、近隣にできたことから、1保1小1中の保小中連携の取組が不可欠になってきています。

そのような環境のなかで、私たち学校事務職員がどのような関わりや役割を果たすのか、今回参加した京都支部の取組実践報告を参考にしながら「地域協働」「学校間連携」を進めていきたいと思います。

第7分科会京都支部 京から発信！つなげる力・つながる心 —京都方式の「学校間連携」と「地域とともにある学校づくり」—

◇ 第Ⅰ節 大会テーマ「地域協働」に向き合う

小中一貫教育の推進により、義務教育9年間の子どもたちの「学び」と「育ち」を目指し、学校・家庭・地域の「横のつながり」と校種間の「縦のつながり」を融合させた、大人も子どもも育つ人育ちコミュニティの創生を目指す取組をされています。

その中で、学校事務職員を取り巻く状況は、事務職員採用の再開により、ベテランと若手の二極化となり、若手育成が喫緊の課題となっているようです。

◇ 第Ⅱ節 チームとしての学校—事務職員に求められていること—

若手育成のため、採用1年目から3年目の学校事務職員に対して、集中的に研修が行われています。採用1年目は、複数配置校（指導する学校事務職員は、ベテランもいれば若手もいる）に配属され、年20回程度の研修を通じて職務を身につけます。その後、1年で異動となり独り立ちとなるようです。若手育成のためには、やはり学校間連携や共同学校事務支援室などとの連携・協働が必要です。

また、事務年間計画表を元にした「業務の“見える化”」による、事務機能の強化をはかり、教職員にも提示することにより、理解が深まり、円滑な校内体制が構築できるというのはいへん参考になりました。（京都市立大宅中学校の取組）

さらに、私たち学校事務職員の強みと言われる、財務を効果的に運営するシステムの整備も進み「合算執行制度・費目調整・学校物品有効活用システム・みやこ学校エコマイレージ・学校予算キャリー制度」と財務を扱う私たちにとってはうらやましい限りのシステムが導入されています。そのシステムを有効活用し、学校の課題であった「図書館を利用する子どもが少ない」ということについて「子どもたちが図書館の中で本を読みやすい環境にしたい」という職員の声をもとに、図書館整備を学校と地域が協働で行った取組は、心が温まる取組でした。（京都市立翔鸞小学校の取組）

◇ 第Ⅲ節 学校と地域の連携・協働の在り方—学校に求められていること—

京都市は教育先進市といわれるほど、教育が盛んな都市です。公立の学校はもちろん、大学の周りには、附属の小学校から高校までたくさんの学校があります。

京都市は、歴史的に地域が学校をつくり、学校もまた地域の一体感を深める場所として機能しています。明治時代、各戸から「竈金」と呼ばれる出資金を集め、小学校の運営費に充てていたことなどから「自分たちの学校」という思いを持ち、地域の結束につながったと考えられるようです。

コミュニティ・スクールの設置状況は、小学校 100%、中学校 90%と高く、地域の子どもは地域で育て、学校と地域が協力して家庭を支えていくことで地域が育つと明確な理念を掲げています。「学校事務職員も学校組織の一員として、地域連携の全体像を把握し、学校・地域全体のつながりを考えて一つ一つの事柄を判断し、調整力・対話力といった『つなげる力』が必要だ。」とお話をされました。

◇ 感想

京都市の取組を聞きながら、自分自身の取組と比較してみると、「こんなことをやってみたいな～」と思うことはあっても、授業時数の確保や児童生徒の実態など目の前の課題に直面し、進めることができていませんでした。さらに今後、教育課程の改訂により学校はますます多忙になることが予想されます。

また、統廃合により地域から学校がなくなったことで、地域と学校にずいぶん距離ができてしまったように感じます。ますます少子化や過疎化が進んでいきます。学校事務職員は、大半が単数配置の一人職ですが、一人で仕事をしているわけではありません。教職員とのつながり、学校間・地域連携による、子どもたちのよりよい学習環境作りを協働で行うために、私たちにしかできないことがあるのではないのでしょうか。まずは、小中の学校事務職員が連携し、地域協働のために自分の考えや思いを発信していくことから始めたいと思います。



「第 49 回全国公立小中学校学校事務研究大会（京都大会）参加報告」

熊本市立龍田中学校 上田起徳

平成 29 年 8 月 2 日から 4 日まで京都市で開催された「第 49 回全国公立小中学校学校事務研究大会（京都大会）」に参加してきました。全国公立小中学校学校事務研究大会への参加は、熊本で開催された大会も含め 2 回目の研究大会になりました。

今回、3 日間参加しましたが、分科会報告等は他の参加者の方からあると思いますので、私のほうからは 1 日目の「文部科学省行政説明」についてご報告したいと思います。

大会テーマ「地域協働による学校づくりと地域づくり」にもとづいた、文部科学省の取組について報告がありました。文部科学省の行政説明では、文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課長の矢野和彦先生から説明がありました。全事研とは関係が深いようで過去の全事研セミナー等での話をされたこともあるそうでした。

まず「学習指導要領」の改訂についての話があり「人工知能の発展により数年後には半分の職業がなくなると言われている。そんな時代だからこそ、未来を生き抜く力が求められている。そのためにも主体的かつ対話的で深い学習をおこなう『アクティブラーニング』が重要であり、そのための教職員が必要なのです。」と力強く語られました。それに関連して「教職員定数の充実」についての話があり、地域協働を充実させ、学校現場の改善を進めていきたいと話をされました。特に強調されていたのは、法律の改正により、学校事務職員の「従事する」から「つかさどる」に変更した点とも言われていました。その点も踏まえ、学校事務職員の地位向上をすることで学校教育を高めていけると考えているとのことでした。また、来年度予算要求においても学校指導体制の充実・学校運営体制の強化を実現していく旨の説明があり、今後ますますの学校事務職員の拡充（共同学校事務室など、共同事務実施体制の強化）をしていきたいという説明もあり、心強く感じたところです。加えて、教頭（教員）の負担軽減においても、法改正（事務をつかさど

る等)に伴い、学校事務職員は今後、管理業務を分担することになるので、教頭との協力を進めてほしい旨を述べられていました。

最後に期待することとして、学校現場においても地域においても、学校事務職員の存在感がこれまで以上に大きくなるのは間違いありませんという力強い言葉をいただき、締め言葉、挨拶となりました。

今回の大会に参加して、京都市学校事務職員の先生方の心遣いや気配り、そしておもてなしに大変感謝しています。今後は今回の研究大会の経験を生かし、地域と共にある学校を意識していきたいと思います。



「全国公立小中学校事務研究大会（京都大会）」参加報告

菊陽町立菊陽中部小学校 川上志緒里

平成 29 年 8 月 2 日から 4 日まで京都市で開催された「全国公立小中学校事務研究大会（京都大会）京から明日～古都から奏でる未来～」に参加して参りました。昭和 44 年 8 月に「より良き教育は、より良き学校事務から」のテーマのもと記念すべき第 1 回大会が京都市で開催されて以降、約半世紀ぶりの京都大会ということで、改めて気の引き締まる思いで参加した 3 日間でした。

1 日目の全体研究会「地域協働による学校づくりと地域づくり～地域との協働を推進する事務職員の役割と学校事務の未来～」では、特に文部科学省初等中等教育局参事官（学校運営支援担当）付学校運営支援企画官 藤岡 謙一氏と京都産業大学現代社会学部教授 西川 信廣氏のテンポの良いやりとりに、笑いをもらいつつ課題の共有をすることができました。また、3 日目の記念講演清水寺貫主 森 清範師の「清水寺の梵鐘」では「見えるものは見えないものに支えられている。見えないものに感謝すること、すなわち梵心」というお話に、日頃の自分自身のあり方を思い返す機会となりました。盛りだくさんであった 3 日間を今振り返っておりますが、歴史ある熊事研の会報という場に掲載していただけたということで、今回は 2 日目の本部研究分科会全事研本部を中心に報告させていただきます。

第 8 次研究中期計画において、4 年次に当たる今大会の戦略領域は「地域協働」でした。私の参加した本部研究分科会全事研本部では「未来を担う子どもをはぐくむ地域協働と学校事務一子どもの育ちと地域づくりの好循環を生み出す地区学校事務室・事務職員の役割」のテーマのもと、新潟大学教職大学院准教授 雲尾 周氏、京都市教育委員会体育健康教育室室長 福西 清次氏のご助言のもと「イエス・ノー」カードやワークシート等も利用した、参加者一体型の活発な議論が繰り広げられました。1,000 名を超える参加者を誰 1 人として置いてきぼりにしない分科会運営に、さすが全国大会という熱を感じました。さて、昨今「共助」や「コミュニティ・スクール」といった「地域協働」をキーワードとするものを耳にする機会は増えてきましたが、実際問題どのように連携することが「地域協働」だと言えるのか。自分自身の中で内容は理解しているつもりでも、これだという確固たる答えを導きだせないままでした。そんな中参加した今分科会で、京都市の歴史として紹介された「番組小学校」が、私のなかで一つの鍵となりました。明治初め、東京遷都による都市衰退の危機に瀕した京都市では「子どもをしっかりと育めば未来は明るい」、「まちづくりは人づくりから」の信念のもと、町衆が「番組」と呼ばれる自治組織毎

に、各家庭が寵の数に応じてお金を出し合いました。子どもがいる家庭もいない家庭も関係なく、地域一体となって創りあげるなかで、学制発布前の明治2年には、64の「番組小学校」が設立され、住民自らの手による学校づくりに成功しました。まさに「地域の子どもは地域で育てる」という京都市の古き良き伝統こそが「地域協働」を支える根底にあると感じました。難しく捉えがちな「地域協働」は「自分たちの地域の子どもをどんな子どもに育てたいのか」、学校・家庭・地域で考え、そして一体となって共有することが始まりであると自信をもてました。「地域の子どもは地域で育てる」というテーマのもと、私たち学校事務職員が「事務に従事する」から「事務をつかさどる」となった意義も見いだすことのできた分科会でした。

私のような3年目の若輩者が、全事研に参加して良いのか、全国大会なんてまだ早い、基礎的な業務がまだできていないのではないかと参加することに自信をもてずにいました。そんなとき「行っておいで」と心強く背中を押し、熊事研の旅費補助をいただけることを一緒になって喜んでくださった菊陽中部小学校の校長先生と先生方、菊陽町学校事務センターの先生方、何よりも「学校のことは忘れて楽しんでおいで」といっぱいの笑顔と少し心配そうなお顔で送り出してくださいました池田主任事務長に、この場をお借りして心からの感謝と御礼申し上げます。全国大会の熱気・活力・出会いに、私自身の「常識」が覆され新しい目を養うことができました。この学びを今後どう生かすか、まさに今大会のサブテーマである「京から明日」へつながる3日間でした。本当にありがとうございました。

研究部各班紹介

研究班のご紹介

私たち研究班は、熊本版グランドデザインについての研究活動をしています。

これは一昨年に開催された全事研熊本大会における「チームくまもと」による発表を受けて、これからの学校事務職員に求められる役割や機能、研修体制等について、実際の会員である県下の学校事務職員の現状を把握したうえで、学校事務職員の意識を変え意識を揃えていくための研究です。

実際の活動は、おおむね月に1回の研究部会の際に、日頃、メールや電話等で進めている研究内容について、実際に顔を合わせて意見を出し合いながら、会員のモチベーションの向上に少しでも繋げられるよう頑張っています。研究班員だけだとすぐにブレそうになる場面もありますが、平野研究部長の巧みな話術とアイデアで軌道修正されながら、真剣さを持ち合わせながらも和やかな雰囲気のもと、研究活動を行っています。

熊本県内の学校事務職員にとって、明るい未来の学校を創造できるような研究内容になるよう頑張っていきたいと思います。



研修班のご紹介



私たち研修班は氏原副会長と班員6名で活動しています。どのような活動をしているか簡単に紹介したいと思います。主に2月に行われる大会の全体会、及び分科会の企画、運営に関することを中心に活動しています。今年度の分科会は例年行われていた地区研報告ではなく、キャリア別研修を行うことになっています。キャリアに応じた必要なスキル、能力とは何だろう、どのような内容にしようかと、普段は使わない脳の領域をフル回転(?)させ、話し合い

を重ねています。脱線することもしばしばですが、その中から仕事のヒントをもらえたり、同じ学校事務職員だからこそわかる話も多く、楽しく活動しています。ちなみに研修班のテーマは「チャレンジ！創造！！みんなの力を合わせよう！！～笑顔あふれる研究大会を目指して～」です。まるで運動会のスローガンのようですが、参加者から満足していただける大会を目指して、がんばっています。また、当日は大会へのご協力をお願いするところがあると思いますので、その際はよろしくをお願いします。

情報調査班のご紹介

情報調査班は、①アンケート調査・集計・考察、②「学校事務必携」の編集・発行、③熊事研ホームページ管理、全国公立小中学校学校事務職員研究会調査（5月・11月）、そして、この④熊本県学校事務研究協議会会報の編集・発行の業務を行っています。また、研究大会時に発行される研究集録の編集・発行も担当しております。

班員は、4人と他の班に比べて少ないですが、明るいキャラクターをもった先生ばかりで、とても楽しく和気藹々と業務を進めています。

業務ごとに担当を決め、担当を中心に業務を進めていますが、本年度はより会員のみなさまに関心をもってもらえるよう、内容や情報提供の仕方を工夫していくことを目標としています。

今年度最初の会報では、新規採用職員の紹介記事を掲載しました。会報については年4回の発行を計画しています。会員のみなさまの身近な内容をピックアップしていけたらと考えています。ホームページにも各地区研の取組や活動内容等、県大会等のアンケート結果等を掲載していく予定です。

また、学校事務必携についても、現在、より使いやすい学校事務必携を目指し、編集作業を行っています。より私たちの取組を身近に感じていただけるように情報提供していきたいと思っています。1年間どうぞよろしくお願いいたします。